

松江のからくり人形

—ねじり児人形



松江のねじり児人形とは・・・

身体つきは御所人形と同じく三頭身の独特の形態とし、白い肌で横太りのあどけない幼児の姿が特徴です。頭巾をかぶり、多くが裸形か腹掛けを付ける程度で、ふっくらと太りよく遊ぶ健康的な子供を理想の姿としています。口に朱をさして微笑む愛らしい表情で、背中に付いた突起を捻じると両手が動き、鈴を鳴らしたり、獅子や馬の玩具を動かし或いは面かぶりの動作をするところから、ねじり児人形またはネジデコ（捻じり人形）と呼ばれます。（デコとは人形のこと）



ねじり児人形の特徴・・・

腕や太ももなどふくよかな体つきで、多くが頭巾に金襴の腹巻や縮緬の陣羽織風の袖なしを着け、足を広げて座る童子の姿とし、春駒や獅子頭、軍配、鈴、お多福面などを持ち遊ぶ幼児のしぐさを表しています。



ねじり児人形の誕生・・・

松江藩主五代松平宣維が享保9年(1724)11月に京都の伏見宮邦永親王の岩姫と結婚されたことに因むとされ、京都から人形師を招き御所人形風に作らせて、岩姫のなぐさみや殿中の贈り物に使われたと言います。他にも宮家からの嫁入りを記念して、松江大橋の欄干に唐金の擬宝珠が付けられ市内の目抜き通りの末次本町の一部には京都の町並みを模して「京店」が作られたと伝えられます。

御所人形とは・・・

西国大名が参勤交代で京都の伏見を通過する際に、禁裏や公卿たちに挨拶として贈り物をする習慣がありました。その返礼にいただいたのが御所人形で、江戸屋敷や国元に持ち帰ったことから「お土産人形」、肌の白さから「白菊」「白肉人形」、頭髪を水引で結ぶように描き「水引手」、頭大人形、また大坂の四ツ橋の伊豆蔵屋で扱っていたことから伊豆蔵人形とも呼ばれました。明治になって、これらの呼び名を総称して御所人形と称されます。その始まりは文化年間(1804-17)に京都の人形師・面吉によるとされますが、江戸前期の説もあります。

人形はほとんどが幼児で、裸のものと腹掛けや袖なしなどの衣装を着たものがあり、細い目が古様で幕末には楕形となり、その後次第に大きくなると見られます。

